

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立雄峰高等学校・教諭・沢辺 直人
- 2 研修期間 令和6年7月25日(木)～令和6年7月26日(金) 2日間
- 3 調査研究課題 どうすれば生徒の「人間力」を高めることができるか
- 4 研修機関等 株式会社インテック大山研修センター
- 5 研修の概要

(1) はじめに

本研修の目的は、教師と企業人の方々とが交流することで、そこから得られる「気付き」を共有し、互いの視野を広げ、「人間力」を持った子どもたちの育成につなげることである。1日目は、3つの講演を聞き、それぞれのテーマに合わせてディスカッションを行った。2日目は、4つのグループに分かれて身体や知能を使ってチームワークや問題解決力を養うアクティビティ研修を行った。また、2日間の研修を通して「人が育まれるために必要なこと」をテーマにグループごとに話し合い、まとめ、発表を行った。

(2) 講演①・ディスカッション 「人間力について考えよう！」

株式会社MGG 代表取締役社長 牧田 和樹 氏

企業経営では企業の理念や方針も大切だが、企業をPDCAサイクルに沿って「動かす」ことが必要である。人を動かすためには、論理的かつ魅力的に「納得」させなければならない。それはつまり、「人間力」である。「人間力」とは「人間性」、「知性」、「意欲」で構成されている。どの要素も大切であり、それぞれの要素を育むためには様々なアプローチが必要である。例えば、「知性」を育むために「動的情報」と「静的情報」が必要であるが、前者には「人脈」が大きな影響を与える。そして、その人脈を自分ひとりで培うことはできないのである。これは、企業経営に限った話ではなく、学校教育でも同じこと。「人間力」をもった教師が生徒を「納得」させる。それはとても難しいことである。だからこそ、私たち自身が様々なアプローチで「人間力」を高めていくことが大切である。

(3) 講演②・ディスカッション 「自分らしく働く」

YKK株式会社 副社長 黒部事業所長 小林 聖子 氏

キャリアとは、人の生き方そのものであり、その80%は偶然の出来事である。その偶然を活かすためには、ポジティブであることが必要だ。海外赴任も目標にしながらもその機会に恵まれず、長い間秘書をすることになった。その秘書の経験や成果が巡り巡って海外赴任につながった。やりたいことと任されることは必ずしも同じではない。しかし、任されたことが経験となり、その経験から得た気付きや学びが「善の循環」として自分に返ってくる。そして、社会に還元される。つまり、自分が置かれた環境を最大限に活かすことができれば、「偶然」にも自分にとって良い結果となる。また、海外赴任の希望を知り、希望を叶えるために会社の人が動いてくれていたことを後になってから知った。自分の想いは伝わるのだと感じた。「来た船に乗りなさい」という言葉にもあるように、任されたことに精一杯取り組むことが大切なのである。

(4) 講演③・ディスカッション 「僕はミドリムシで世界を救うことに決めました。」

株式会社ユーグレナ 代表取締役社長 出雲 充 氏

大学1年生の時に、バングラデシュにあるグラミンバンクで1か月間インターンを行った。ここでは、自分の名前すら書けない年収3万円程度のバングラデシュの貧困層に対して3万円を無担保で貸し付け、経済的な自立を促すソーシャルビジネスを実現しているのを目の当たりにした。グラミンバンク創設者のムハマド・ユヌス氏との出会いがすべての始まりだった。バングラデシュでは、お腹いっぱいカレーを食べているにも関わらず多くの人が栄養バランスの片よりで栄養失調になっていることも知った。この経験から栄養価の高い「ユーグレナ」(ミドリムシ)を用いることを考えたのである。居心地の良い東京からバングラデシュという「自分が行ったことがない」、「母語が通じない」、「頼れる人がいない」場所へ行ったことで大切な経験をするこ

ができた。“Get out of your comfort zone!”（失敗するリスクを負って何か新しいことにチャレンジしよう！）が大切なのである。

ユーグレナの培養、販売には数多くの失敗をした。しかし、失敗しても諦めずに繰り返し、成功した。「試行回数×科学技術＝イノベーション」なのである。

何かを成し遂げるためには、「メンター」と「アンカー」が必要である。メンターとは、“自分の人生に指針を与えてくれるひと”のこと。つまり、ムハマド・ユヌス氏である。「アンカー」とは、“自分の心をつなぎ留めておく、いかりのようなもの。いつでもそれを見れば、必ず原点を思い出させてくれるもの”のこと。私にとってはバングラデシュで購入した青いTシャツであった。富山でも若者に心の底から尊敬できる師匠（メンター）と、夢を持ち続けるためのアイテム（アンカー）の2つが揃えば、若者が何度でも繰り返し挑戦し、イノベーションを起こすことができる。若者のメンターとなり、若者に夢を持つきっかけと夢を追い続けるためのアンカーを与えることが大切だ。

（5） アクティビティ研修

① グランドルールの設定

アクティビティ研修を通してそれぞれの参加者が達成したい目標をグループ内で一つのグランドルールとして設定する。グランドルールを設定することで、参加者が安心してコミュニケーションを取る環境ができ、活発なコミュニケーションが生まれ、研修全体をスムーズに進めることができる。私たちのグループでは、「コミュニケーションを取る時にグータッチをする」というグランドルールを決めた。年齢や立場を乗り越え、全員がグループの一員として一つになっていくことを実感した。

② ヘリウムリング

グループのメンバーが1つのフラフープを囲み、胸の高さで利き手の人差し指の第一関節にフラフープを乗せ、立った状態から誰も指を離さずにフラフープを地面に置くアクティビティ。このアクティビティの課題は「時間内に一番早いタイムを出す」こと。失敗の回数に囚われず、どれだけ多く試行して課題を解決していくことができるかがポイントであった。私たちのグループでは、どうすれば課題をクリアすることができるか作戦を立てることに多くの時間を使ってしまい、試行回数を増やすことが出来なかった。しかし、全員で協力しなければ達成できないテーマに対して、全員が誰かひとり責めることなく、どうすれば課題をクリアできるか話し合いを重ね、チームワークを深めることができた。

③ TPシャッフル

一本の丸太に乗り、丸太から絶対に落ちない条件で、決められたお題に沿って並び順を替えるアクティビティ。このアクティビティの課題は「時間内に4つの課題をクリアすること。4つの課題をクリアすることはもちろん大切だが、残り時間を確認しながら、時間内にクリアすることがポイントであった。私たちは、それぞれの課題に取り組むことに必死で時間を確認することを忘れてしまい、最終的に研修担当者に指摘を受けることで制限時間を過ぎていくことに気付いた。それぞれの課題自体は難しいものではなく、時間をかければすべてのグループが課題をクリアすることができたはず。しかし、仕事を進めるうえで時間を守ることはとても大切であり、時間内で結果を出してこそ評価を受けられることを改めて気付かされた。

④ ブラインドテント

このアクティビティのルールは、「制限時間内に4つのテントを完成させなさい」、「テントに触れる人は、目隠しをしなければならない」、「目隠しをした人は、テントを立て終わるまで目隠しを外してはならない」、「目隠しをした人は、目隠しをしていない人と触れ合うことはできない」「目隠しをしていない人は、人、もの等、いっさい何も触れてはならない」というもの。このアクティビティでは、自分のグループのテントを完成させるだけでは、課題を達成することができない。つまり、4つのグループが協力して課題に取り組む必

要性に気付けるかがポイントであった。私たちのグループは、このアクティビティのポイントにいち早く気づき、グループ間で協力しながら課題達成を目指した。①～③のアクティビティでは、アクティビティに取り組むことに夢中になってしまったが、④のアクティビティでは、ゴールを見据えて何をすべきか考えながら取り組むことができた。課題終了後、すべてのグループが自然と互いを讃え合っていた姿がとても印象的だった。

⑤ 研修のまとめ、発表

グループごとに「人が育まれるために必要なこと」をテーマに話し合いを行った。本研修を受ける前に同じテーマで話し合いをしていたら、きっと違ったまとめになっていたと思う。それは、この2日間で得た気づきや学び、そして広がった視野や深まった思考に依るものである。私たちがこのテーマについて挙げたことは「他」、「感動」、「ミッション」の3つ。自分にとって「他」の存在、価値観、環境との関わりから乗り越えなければならない「ミッション」を見付け、「感動」を拠り所にして人が育まれるとまとめた。つまり、私たちが2日間で育まれたその過程そのものである。他のグループの他の人のまとめが私と違う結果になることも自然なことと思う。生徒にどうアプローチするか、身をもって感じた。

(6) 本研修を通して

本研修では、他校の教員や企業の方との交流の場が多く設定されていた。交流の機会がなく、私ひとりで研修を受けていたならば得られないであろう多くの気づきや学びがあった。同じ話を聞いていても人によって受け取り方が異なり、受け取った内容から何を考えたかも人それぞれであった。その違いが議論の種となり、さらに気づきを広げ、学びを深めることにつながった。また、企業の社長と話す機会はとても貴重であり、その知見や物事に対する考え方に触れることができたことは私にとって大きな衝撃であった。勤務校では、本研修での学びを教員間で共有するとともに、スクーリングやホームルーム等での実践に活かしていくことで、「人間力」を持った子どもたちの育成につなげることができると確信している。

最後に、今回の研修にあたり派遣研修を許可していただいた富山県教育委員会をはじめ、学びの場を提供して下さった富山経済同友会の方々に、心より感謝を申し上げ研修報告とする。